

## 〈はじめに〉

子どもの頃、『奥様は魔女』というアメリカの人気コメディを、テレビで観ていました。魔女のサマンサのご主人のダーリンは広告会社の社員。ドラマの中で、ダーリンは広告のクライアント(依頼主)に、何枚ものフリップ(説明用のボード)を見せながら、自分の広告プランを説明します。上司のラリーは、クライアントの顔色を見ながら、それを褒めたりけなししたりして何とか契約に持ち込もうとします。子供心に、こんな仕事アメリカにはあるのかと不思議でしたが、いま思えば、それがプレゼンテーションというものに初めて触れた機会だったと思います。ダーリンは、現在の日本で言えば、糸井重里さんや佐藤雅彦さんのようなコピーライターで、当時は紙のフリップで説明していましたが、もし彼がいまも仕事をしていたら、間違いなく、パワーポイントを使ってプレゼンテーションをしていると思われます。◆『奥様は魔女』から半世紀。プレゼンテーション(略してプレゼン)ということばは、当初の広告業界の業務から大きく広がって社会に普及し、ビジネスの場だけでなく、研究報告や講義など、自分の中の伝達したい情報を、誰かに伝えるための発表活動をも含めるようになりました。自分自身も、この学習会や学校での研修会などで、年間十数回の“プレゼン”を行っています。以前は、発表・報告と表現していたものを、プレゼンと呼ぶようになったのは、何と言っても、先にあげたパワーポイントというプレゼンテーションソフトウェアの出現が大きいのではないかと思います。パワーポイントによる発表＝プレゼンが社会に定着したのは、その画期的な機能が、発表形式だけではなく、人の思考にまで影響を与えるものだったからではないでしょうか。パワーポイントを手探りに使い続けてきた自分も、伝えたいと思うことを、よりわかりやすく表現するための工夫を模索してきました。その工夫のいくつかは、プレゼンの改善にとどまらず、自分の思考を援助するものとして、また知識状況を映し出す鏡として、十分な機能を果たしてくれています。◆そして最近、プレゼンテーションは、ことばのテーブルで、学習課題としても活躍しています。最初は、「先生からのお話」という形でのプレゼンを、子どもが聴く、という理解・鑑賞型のものでしたが、この頃は、子どもの方が、写真や映像、さまざまなグッズなどを持参して、自分の経験を“プレゼン”してくれるようになって来ました。ことばだけの説明に比べて、それは楽しく、伝えたいという気持ちが、よく伝わってくる活動になっています。◆今回は、プレゼンテーションの先駆者とも呼べるような江戸時代の旅行家の紹介を端緒に、語る・伝える・楽しむ、などの点でプレゼンと密接なつながりを持つ「作文」についても考えてみたいと思います。プレゼン・作文において、作り手と聴き手、もしくは書き手と読み手、双方にとって、備えていなければならない大切なことは何か。また、より良く伝えるためにはどのような方法があるか。「関心と共有」「シークエンス」が、今回のそれぞれのキーワードです。◆奥様は魔女のことで、もうひとつ思い出したことがありました。ダーリンがクライアントに広告のコピーやデザインを見せようとする、いじわるなお姑さん(サマンサのママ)が、魔法でそれを、突拍子もない文句やタバサ(ダーリンの娘)の描いた稚拙な絵に変えてしまいます。ダーリンたちはうろたえ平謝りするのですが、クライアントがそれを、ユニークだ!と気に入ってしまうことが多いのです。散々ダーリンをこき下ろしていたラリーが、それを聞いて手のひら返しで「ダーリン、凄いじゃないか!」という所もコメディの見せ場のひとつですが、いま思うと意外とこれは深いのかも。予定調和の中では創造は生まれ、ということを経験したかったのかも知れません。